

## 10月19日は樋口敬二先生のご命日

山田 功

令和7年度友の会、秋の研究会が10月19日寺田寅彦記念館で行われた。その日は高知県立文学館の川島禎子さんの「子規と寅彦」と題されての俳句のお話しがきけた。川島さんは、明治文学がご専門の文学博士、雑誌『窮理』では「窮理の種」と題する随想を毎回ご担当、また、窮理舎発行の寅彦本での解説でもご活躍である。是非一度お話を伺いたかった方である。それが実現でき、充実したよい日であった。

その日は丁度、名大名誉教授樋口敬二先生（1927～2018）の命日で、すでに7回目を迎えた。七回忌は去年という事だろうか。樋口先生は岩波書店発行の新版『寺田寅彦全集』の編集を太田文平さんと担当された。そのチラシにも書いておられるが、先生は自身を寅彦の孫弟子であるとよくおっしゃった。それは樋口先生が中谷宇吉郎の直弟子であり、中谷宇吉郎は寺田寅彦の一番弟子であるからだ。そして、心底寺田寅彦を愛しておられた。

樋口先生は『榊』51号（2006）に「「電車の混雑」に関する記録を」と題して寄稿をされている。そこには旧制三高時代に京都で市電の運行状況を調査された記録を示され、場所、時期によって違いがあるのか比較をしたいからと友の会会員に調査を呼びかけた。

樋口先生は旧制中学の頃、寺田寅彦の日常何でもないと思っている出来事に疑問を抱き、観察して、考えを進めるその過程を示している作品に魅せられたという。「電車の混雑について」もそうであり、実際に京都の街で観察されたのである。私の住む名古屋ではどうの昔、市電はなくなり、エレベーターはコンピュータで管理される時代になってしまったので、協力ができなかった。

2014年（平成26）12月『榊』72号に私が「藤の実はいつはぜるか」を発表した時、樋口先生からすぐにハガキが届いた。そこには「この度、『榊』に掲載された「藤の実はいつはぜるか」を拝読し、非常に興味ある実験なので、気象研究者も興味を持たれると思い、適当な発表の機会を考えたいと思います。先ずは感想のお知らせまでにて失礼いたします。」とあった。この観察の切っ掛けは勿論寅彦の随筆「藤の実」である。これを読んで自分でも藤の実はいつはぜるのか調べてみたいと思い、藤の実を部屋に吊るし観察を始めた。これは樋口先生が寅彦の随筆「電車の混雑について」を読んで、自分でも観察をしたことと思いは同じである。それを樋口先生はとても面白がってくださった。

樋口先生と手紙のやり取りは、2000年11月から2017年4月まで続いた。その数は26通。そして、いつも手紙には、関連資料が添えられていた。先生のお心遣いには感謝の外はない。一番印象に残っている手紙は、中谷宇吉郎の『春艸雑記』のカバーに風船爆弾の風船の紙で作られた特装版があることの調査で、樋口先生がお持ちの本を見せていただい

た。そのお礼の手紙の返事である。風船爆弾紙のカバーの端、3.5 cm四方を切り取って貼ってあったのである。そして「さて、拝読してやはり、風船爆弾の紙のオリジナルを手元におかれた方がよろしいかと存じ、カバーの下記の部分を持って同封しましたので、紙の実感をお楽しみくだされば幸いです。」とあった。よくもまあ大切な本のカバーを切り取って私にくださったものだと感動し、感謝申し上げたのである。

樋口先生は日本エッセイスト・クラブ賞を受賞されているように、わかりやすく、美しい文章を書かれる。これも寺田寅彦・中谷宇吉郎の系統を継がれておられる。絵もお上手で画集を出されていることも寅彦・宇吉郎に続いている。雪氷学がご専門であるが、そうしたご活躍の一端はご著書『雪と氷の世界から』（岩波新書 1985）で知ることが出来る。

樋口先生は飛行機が大好きであられた。新聞に飛行機に関する記事があればすべて切り取り、スクラップ帳に整理されておられた。そうした飛行機に関する資料は、岐阜県各務原市にある“岐阜かかみはら航空宇宙博物館“に寄贈されたと聞いている。『夢を翔んだ翼ポイジャー』（2010）という飛行機の本まで出されている。

最近気づいたことであるが、樋口先生は日本初の熱気球有人飛行に成功したイカロス 5号の相談役をされていたことである。熱気球イカロス 5号は京都の高校生大学生のグループと北大探検部の若者が共同して飛ばした。それは『熱気球イカロス 5号』梅棹エリオ（中央公論社 1972）に書かれている。熱気球イカロス 5号を作った中心人物で、著者でもある梅棹エリオ氏は『知的生産の技術』（岩波新書）の著者として有名な国立民族博物館初代館長梅棹忠夫氏の長男である。出版当時、私は面白い元気な若者たちがいるものだとこの本を読んで思ったことだが、それに樋口先生が係わっておられたことは全く気に留めなかった。最近、再読してそれを知り驚いた。「はじめに」と「解説」を書いておられるのである。

風船爆弾紙の話先生とした時は、このことについては全く触れられなかった。『熱気球イカロス 5号』を樋口先生に贈った著者梅棹エリオ氏のサイン入り献呈本は、今は私の手元にある。

